

「昭和精神史における平生鈞三郎」(『甲南法学』第60巻第1・2・3・4号) 正誤表

3頁1行目	諸岡和徳 → 諸岡知徳
4頁10行目	安宅産業 → 安宅商会(後の安宅産業)
4頁13行目	二千万円 → 七百万、換算基準如何によっては最高額で二千万円
5頁5行目	二楽壮 → 二楽荘
6頁2行目	通説 → 痛言
7頁17行目	文部大臣も → 文部大臣からの
8頁13行目	なりせば → なかりせば
9頁13行目	甲南中学卒業生 → 甲南中学生
12頁10行目	割合と奇しくも → 割合二十五パーセントを引ききました数と奇しくも
17頁7行目	との異名をもつ → との異名の所以である
22頁6行目	発端となりました昭和 → 発端となりましたのは昭和
23頁15行目	云ふやよな → 云ふやうな
25頁15行目	害するもとした → 害するものとした
35頁10行目	部憲法 → 部憲法学
36頁12行目	おなざり → おざなり
38頁11行目	追放すること → 追放することが目的であり
39頁16行目	『憲法議解』 → 『憲法義解』
43頁2行目	ならい → ならない
49頁18行目	五日で切れています。翌六日 → 六日で切れています。翌七日
51頁1行目	候補でありましたが → 候補でありましたが
56頁18行目	立っております → 立っておいりました
57頁2行目	校長にしました。明治三十九年四月の事です。 → 校長にしました明治三十九年四月の事です。その新渡戸の愛読書になったようです。
62頁12行目	国民として → 国民をして
71頁11行目	とい約束 → という約束
74頁9行目	こそ → こそ、それは
75頁5行目	教学刷新協議会 → 教学刷新評議会
77頁13行目	結ぶんで → 結んで
78頁17行目	教学刷新協議会 → 教学刷新評議会
79頁2行目	教学刷新員会 → 教学刷新委員会
81頁18行目	鶴見女子大学 → 鶴見女子大学の
91頁10行目	違いをむしろ強調 → 違いを強調
92頁5行目	犠牲的精神、 → 犠牲的精神を学んで居ります。
92頁8行目	統一船 → 統一せん

- 93 頁 16 行目 もとして → ものとして
- 95 頁 7 行目 翌年 → 同年
- 96 頁 3 行目 昭和会 → 協和会
- 100 頁 10 行目 三五三頁)。 → 三五三頁)。村岡典嗣はと言えば、敗戦の年の九月十二、十三両日、東北帝国大学法文学部第一教室にて学生や市民に向かって「日本精神を論ずー敗戦の原因ー」と題して、福澤文明論の国体観念を援用して、政権が外国人に委ねられ国体が護持でき得なかったと、痛恨に満ちた言葉で語ったのでした（村岡典嗣『国民性の研究ー日本思想史研究第五卷』創文社、昭和三七年、三五七頁）。
- 102 頁 4 行目 二六五頁)。 → 二七三頁)。
- 102 頁 17 行目 学ばさせてくれました → 学んだ
- 105 頁 9 行目 Bagehof → Bagehot
- 107 頁 1-2 行目 が「疾病の・・・しょう」 → を疾病の・・・しょう
- 107 頁 5 行目 無始よりより → 無始より
- 108 頁 2 行目 宗教的精神 → 国民的精神
- 108 頁 4 行目 異なりキリスト教 → 異なり国民的精神の核ともなるキリスト教
- 108 頁 11 行目 二六三、二八〇頁)。 → 二六三-六五、二八〇頁)。
- 108 頁 16 行目 可能であるとの → 可能であるからとの
- 109 頁 17 行目 展開 → 寄稿
- 111 頁 1 行目 『源氏物語を』 → 『源氏物語』を
- 112 頁 7 行目 右翼であった → 右翼の動きがあった
- 113 頁 18 行目 個性に在った → 個性に合った
- 115 頁 15 行目 Every man's → Everyman's
- 116 頁 2 行目 それを → それらを
- 119 頁 3 行目 そこには → それは
- 119 頁 12 行目 あります。 → あります。平生も「無智の国民」と「有識の国民」との対戦との認識はありましたが (⑩三九)、
- 121 頁 15 行目 津島 → 津島前掲編
- 123 頁 7 行目 その冒頭部 → 安政二 (一八五五) 年六月十八日 (旧暦) 第二場で講じた「梁恵王上」第二章の冒頭部
- 123 頁 11 行目 human heings → human beings
- 124 頁 4 行目 しょうか。 → しょうか。もともと巨額の国費で造った大学にして選り抜きの特別な秀才を輩出している卒業生の性根が「出世志向だけの亡者、卒業証書だけが目的の蝗群」とあっては、平生ではありませんが、「節義喪失の秀才」として、「およそ世に始末の悪いものはない」を地で行くことになり、彼らの暗躍ぶりを見せつけられた戦後三十五年の時代状況を顧みますれば疑問かもしれませんが (中野好夫『人は獣に及ばず』みすず書房、一九八二年、一七九-一八〇頁)。